



下小田原からの初日の出(2025.1.1)

新年明けましておめでとうございます。本年も、公民館活動へのご協力をよろしくお願いいたします。

2026年は、冬季オリンピック、WBC、サッカーワールドカップなどの大きなスポーツイベントが開催予定で、楽しみな年になりそうです。地域の皆様方にも、明るく笑顔に満ちた一年になってくれることを願っています。

年忘れ笑いの会



12月13日に「年忘れ笑いの会」が開催され、寿限無の会の墨亭河童さんと嗜好亭艶馬さんの高座や謎解きなどを楽しみました。

参加者の方々から、「感情がこもって、つい泣ける思いでした」「楽しい時間を過ごせ、ありがとうございました。次回も楽しみにしています。」などの感想をいただきました。

神金トピックス&ニュース

神金振興会・第2回代表者会

12月4日に「神金振興会第2回代表者会」が行われ、地区内各組織の代表者の方々が参加し、今年度前半の事業などについて話し合いました。

議事終了後に、山賀議員から選挙のお礼などの挨拶が、小野前議員から退任の挨拶が行われました。



秋季火災予防運動に伴う消防演習



11月16日に秋季火災予防運動に伴う消防演習が神金小学校で行われ、通報、連絡、初期消火訓練及び避難誘導訓練並びに甲州市消防団と塩山消防署による火災防ぎょ訓練が実施されました。

甲州神金チーム 連続優勝

9月26日に交通安全ゲートボール大会、11月5日に火災予防ゲートボール大会が行われ、甲州市・山梨市から27チームほどが参加する中で甲州神金チームは見事に連続優勝を成し遂げました。出場した選手の皆様、おつかれさまでした。



神金の歴史

◆今回で「神金の歴史」は最終回となります。

執筆していただいた故飯島卓郎氏に感謝したいと思います。

郷土の人 四

神金村に生まれ、こよなく郷土を愛し、生涯武田信玄を崇敬し自慢の種としていた田辺治通氏は、昭和八年建国早々の満州国参議に就任した。

当時の日本は経済政策の失敗から不景気のどん底で、人口は増加するが働きたくても職が無く、娘を売って借金の返済や生活費にしたという時代であった。時の政府は中国の満州に着目し、この広大な大陸に進出することを考え、これに共鳴する中国の一部の人達と協議の上、反対もあったが満州国を独立させた。満州には南満州鉄道をはじめ幾多の権益を保有していたので、この警備のため関東軍と称し陸軍の兵隊が多数派遣されていた。

田辺氏は参議就任により、今まで一日たりとも欠かしたことの無い好きな酒を禁じたのである。特に礼節を尊ぶ中国人に対し失敗をしてはならないので悲愴の決意で禁酒をしたのである。

新たに国を建てるので憲法の起草、行政の組織・治安・産業等々重要な案件は山積みしていた。特に氏が参議に選ばれた理由は

一 清廉潔白な人であった。当時の中国は賄賂（袖の下）がなければ何もできなかった。しかし、氏は永い役人生活中絶対に不正を戒めて自ら範を示し有名であった。

一 強い者に屈せず弱い者を助ける人であった。当時満州に駐留した関東軍は、満州国を建設したことを手柄として横暴を極めていた。これを押さえるには氏が最も適材であった。

特に、満州で金儲けを企んだ大小の利権屋が押しかけたが、取捨選択を誤らず悪質の業者を排除したことは高く評価された。満州国参議としての五ヶ年間は自ら酒を断ち、悲愴の覚悟で日本の生命線として五族協和、王道楽土の国を建設しようとする信念と弛まざる努力が広く認められ、田辺治通氏の名声は日本の各界から高い評価を得た。

昭和十四年、平沼騏一氏に内閣総理大臣の大命が降下されると直ちに組閣参謀となり、非常時内閣の組閣を完了し、自ら官房長官となり内閣を取り仕切った。官房長官としては堂々として閣僚は友人扱いで軍部の圧力にも屈せず、齒に衣を着せず信念を貫いて平沼内閣を助けた。

*次ページに続く

神金の歴史

内閣改造により元の古巣の逓信省に戻り大臣に就任した。大臣就任を祝って神金村村長をはじめ各種団体の長二十二名がお祝いの挨拶のため上京した。その折奥様を中心にした写真があるが、現在存命者は当時在郷軍人分会長の上萩原の広瀬保氏のみにて他の人はすべて昇天している。田辺氏は村長以下の表敬訪問に答えて六月十日の時の記念日に、飛行機にて郷土を訪問し神金村の上空を旋回し、村長宛の手紙を通信筒に入れて投下した。

副総理兼逓信大臣として、今までの日本国だけでなく大東亜圏を構想した通信、海運、航空等、陸・海軍と協調してこの諸策を樹立した功績は大であった。外交上の問題で平沼内閣は総辞職したが、飛行協会会長・貴族院議員として休む暇はなかった。

満州事変は日支事変となり更に拡大の一途を辿り、時局はますます緊迫化した。昭和十六年七月第三次近衛内閣が誕生し、氏は内務大臣に任命された。近衛総理は満州国の独立を中国侵略と世界中から非難された。国民は平和を望んでいるので事変の早期解決を図るべく人材を登用したが、軍に信頼があり軍部に対し遠慮なく発言できる氏が主要閣僚に迎えられたのである。しかし、大東亜共栄圏を理想とする軍部の主戦論と現地の戦略拡大を阻止することができず、三ヶ月余りの必死の努力の甲斐もなく万策盡きた。そして、遂に東条内閣にバトンは渡されたが、その二ヶ月後の十二月八日、米・英に対し宣戦を布告し、取り返しのつかぬ泥沼にはまり込んでしまった。

氏の内閣官房長官時代に起きた狭心症は逓信大臣の時に再び発作を起こし、以来治療に努力はしたが、連日の激務と早期解決の意に反する情勢への不快や焦り、更に敗戦のショックは病を一層重くした。

昭和二十四年九月下旬、発作により逓信病院に入院したが重体であった。年末まで生きられるか案ぜられたが、翌年一月三十日の夜風が荒れ狂う嵐の中、午後八時、夫人や多くの身よりの人々に看とられながら静かに最後の息を引き取った。享年七十三歳。葬儀は本郷の喜福寺で行われたが、新聞・ラジオ等で訃報を知った人々が全国から駆けつけて道にあふれ、空前の弔問者だったそうである。

戒名は「浄徳院殿鉄心國大居士」、巨星は遂に落ち永遠の眠りについた。